

古文 読解問題 「宇治拾遺物語」 絵仏師良秀 ①

これも今は昔、絵仏師良秀とアいふありけり。家の隣より火出で来て、風おしおほひてせめければ、逃げ出でて、大路へ出でにけり。①人の書かする仏もおはしけり。また衣着ぬ妻子なども、さながら内にありけり。それも知らず、ただ逃げ出でたるをことにして、向かひのつらに立てり。

見れば、すでにわが家に移りて、煙、炎くゆりけるまで、おほかた向かひのつらに立ちて眺めければ、「あさましきこと。」とて、イ人ども来とぶらひけれど、騒がず。「いかに。」と人言ひければ、向かひに立ちて、家の焼くるを見て、②うちうなづきて、時々笑ひけり。「あはれ、しつるせうとくかな。年ごろはわろくかきけるものかな」と言ふ時に、とぶらひに來たる者ども、「こはいかに、かくては立ちたまへるぞ。あさましきことかな。物のつきたまへるか。」と言ひければ、「なんでふ物のつくべきぞ。年ごろ不動尊の火炎を悪しくかきけるなり。今見れば、かうこそ燃えけれど、心得つるなり。これこそせうとくよ。③この道を立てて世にあらんには、仏だによくかきたてまつらば、百千の家も出で来なん。わたうたちこそ、させる能もおはせねば、物をもをしみたまへ。」と言ひて、あざ笑ひてこそ立てりけれ。

その後にや、良秀がよぢり不動とて、今に人々愛で合へり。

問一・次の文は「宇治拾遺物語」について説明したものである。空欄に入る言葉を答えなさい。

「宇治拾遺物語」は（ア）時代初期に書かれた（イ）文学（集）である。作者は不詳で、『宇治大納言物語』に入らなかつた（イ）がまとめられたものだとされている。後世にも影響を与え、（ウ）が書いた「鼻」は「鼻長き僧の事」から着想を得たとされている。

問二・傍線部①「人」が指しているものとして適切なものを次の中から選びなさい。

ア・絵仏師良秀 イ・絵仏師良秀の妻子 ウ・絵仏師良秀の依頼人 エ・火事を見に來た野次馬

問三・傍線部①「人」が指しているものとして適切なものを次の中から選びなさい。

ア・家に残されている家族の様子を見て、家族の無事を仏に願うことしかできないと思つたから。
イ・家が燃えている様子を見て、今まで上手く描くことのできなかつた炎を会得したと思つたから。
ウ・家が燃やされることによつて、うまく描けなかつた不動尊の絵を見なくてすむと思つたから。
エ・家が燃え広がっているのを見て、家や財産を失う絶望感から、笑うしかなかつたから。

問五・傍線部③「この道を立てて世にあらんには、仏だによくかきたてまつらば、百千の家も出で来なん。」を現代語訳しなさい。

読解問題「宇治拾遺物語（絵仏師良秀）」① 解答・解説

問一・ア 鎌倉 イ 説話 ウ 芥川龍之介

：「絵仏師良秀」も芥川龍之介の「地獄変」のモデルになつたと言われている。

問二・ア いうありけり

：文の先頭・助詞以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」に変換する。

イ ひとどもきとぶらいけれど

：「来」は連用形なので「き」と読む。文の先頭・助詞以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」に変換する。

ウ ものをもおしみたまえ

：助詞以外の「を」は「お」に置き換える。文の先頭・助詞以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」に変換する。

問三・ウ

：「人」のしたの「の」は文脈から「主格」と判断することができる。「する」は使役の助動詞で、「人」が書かせたことがわかるので、絵仏師良秀に仏を描くよう依頼した人物だと判断することができる。

問四・イ

：「なんでふ物のつくべきぞ。年ごろ不動尊の火炎を悪しくかきけるなり。今見れば、かうこそ燃えけれど、心得つるなり。これこそせうとくよ。」というセリフの部分から判断する。

問五・

この道を職業として世の中を生きてゆくには、仏様だけでもうまくお書き申しあげれば、百や千の家などすぐできるだろう。